

第一大臼歯の異所萌出の治療についての一考察

○ 住吉彩子、楠元正一朗*、柳川淳子、坂口繁夫

さかぐち小児・矯正歯科医院、*中央歯科医院

〔目的〕 最近、乳歯の崩壊、最後臼歯の歯根吸収、早期脱落が原因で、第一大臼歯の近心傾斜による異所萌出に遭遇する機会は少なくない。小児の成長発育の上で第一大臼歯の正常萌出は重要である。われわれは第一大臼歯の近心傾斜による異所萌出を回避する簡単な処置法を考案したので報告する。

〔方法〕 第一乳臼歯と第二乳臼歯をツイストワイヤーおよびスーパーボンドにて固定し、セパレート用エラスティックゴムを第二乳臼歯と第一大臼歯歯間部に挿入して第一大臼歯を萌出誘導する。エラスティックゴムは状態に応じて直径の異なる数種を使用する。

〔症例〕 症例1：8歳11か月、女兒。〔6〕は半萌出で近心傾斜が認められた。〔6〕の歯冠が干渉し〔E〕は歯根吸収が認められた。本処置法を施行。エラスティックゴムは2～3週間後に交換し、1か月後除去。

症例2：6歳5か月、女兒。埋伏〔6〕の近心傾斜がみられ〔E〕の遠心歯根を圧迫吸収していた。〔6〕相当部歯肉を切除し開窓を行った後、本処置法を施行。エラスティックゴムは2～3週間後に交換し、4か月後除去。ワイヤーはスペース確保のため除去せず経過観察中。

〔考察〕 本法は、第一大臼歯が近心傾斜し正常萌出が見込まれず、第一、第二乳臼歯が残存している場合が適応となる。これまでセパレート用エラスティックゴムを用いて第一大臼歯の萌出誘導を行った報告はある。しかし、第二乳臼歯の歯根吸収が顕著な場合は、アンカーとしての機能を果たせない。本法は第一、第二乳臼歯をワイヤー固定することで、アンカーとしての十分な維持が得られ、第二乳臼歯の抜歯を余儀なくされた症例でも非抜歯で第一大臼歯の萌出誘導が可能な簡易な方法であると思われる。

8歳男児下顎骨骨折への対応と骨折線上の犬歯歯胚の経過

○ 藤瀬多佳子¹、明彦征美¹、松石裕美子¹、白土雄司²、浅井美孝³、野中和明¹

¹九州大学病院口腔保健科小児歯科、²九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態講座、

³九州大学病院歯科技工室

【緒言】

小児の下顎骨骨折では、顎骨の成長発育を考慮し、加療後の咬合異常や顎変形症が生じないように、成人の顎骨骨折とは異なった対応が必要である。今回我々は、混合歯列期小児の下顎骨骨折に対し、顎内外固定装置を用いて保存的治療を行ったところ、良好な経過を辿った1例を経験したので報告する。

【症例】

患児：8歳男児。

初診日：平成16年1月9日。

主訴：咬合不全、下顎部の腫脹および疼痛

現病歴：平成16年1月7日に交通事故により頭部を打撲し、九州大学病院救急部に搬送された。下顎骨折と右鎖骨骨折を指摘され、1月9日に顎顔面口腔外科初診。同14日に保存療法のため小児歯科初診。

臨床診断：下顎骨骨折、〔2〕完全脱臼、同部位の歯肉裂傷および〔T〕の垂脱臼。

CT検査所見：右側下顎角から筋突起に至る下顎枝と、〔2〕から遠心方向に走り〔3〕歯胚頰側を通り下顎下縁に達する骨折線を認めた。

処置および治療経過：口腔外装置として、顎角部を含めた特製下顎パッドと頤帽を併用し2週間の下顎運動制限を行った。口腔内装置として、骨片呼吸防止用可撤式プレートを1週間使用した。その結果、咬合と顔貌の対称性は回復し〔3〕歯胚も良好な経過を辿っている。

【考察】

混合歯列期の顎骨骨折には、顎の成長発育と歯の交換に伴う種々の要因を考慮しながら、咬合の回復と管理を行う必要があることが示唆された。